

# 都市の 中の 牧畜民

## ナイロビのマサイとソマリ

池谷和信

### 1 はじめに

アフリカ諸国の国民経済を論じる場合、ソマリアやスーダンにおけるラクダ生産やサヘル地域にみられるウシ生産などの事例を除いて、牧畜民より農耕民に関心が集中しがちである。この傾向は、国土の3分の1に牧畜民が住む半乾燥地域が広がるケニアにおいても当てはまる。しかし私は、1991年4月から1年間ケニアのナイロビに生活した経験から、ケニアを代表する牧畜民であるマサイやソマリなどが、国民経済の中で果たしている役割や、彼らの都市生活の実情を把握することの重要性は無視できないと考えている。

本稿では、ナイロビのスラム(低所得者層居住地)で民芸品生産に従事するマサイの人々、ナイロビ郊外に集住化しているマサイ、さらに市内に分散して家畜の仲買人をしているソマリとを対比しながら、彼らの都市での生活の一側面を述べてみたい。このような試みを通して、牧畜民の特殊性を強調しがちな人類学的研究と国民経済のなかで牧畜生産を排除して論じる傾向のある経済学的研究をみなおし、あらたに両者を統合する道が開かれるものと期待している。

### 2 スラムでのマサイとサンプルとの出会い

ナイロビの中心部から西にナイロビ国立公園の方向に車を走らせると、右手にうす茶のトタン屋根と泥の家のかたまりがみえてくる。これが、人口20万余りといわれるナイロビで最も大きなスラムのケベラ地区である。ここの住民の多くは市内の工業地域で働いているといわれ、夕方には東京のラッシュアワー時のような人ごみになるのに対して日中は閑散としている。

私は、カンパの一青年をつれて幾度かここを訪れたが、スラム内の市場の物価は安く、その青年は鉄道線路沿いの市場で100ケニアシリング(1ケニアシリング=約4.5円、以下Kshと略す)でジーンズを買ひ、あとで友だちに300Kshで売ると言っていた。降雨の後では道はぬかるみ、斜面を川のように水が流れる所を下ってみて、はじめて立地条件の悪さがわかったものである。私にとっては、スラムのなかでドライクリーニング屋を見るなど予期せぬことが多く、この入口に立った時には、森林の中へ猟に行こうとするハンターのような気持ちの高まりを覚えた。

この地区には多くのマサイが住むというが、そ

の数はわからない。常に厚手の背広を身につけた40歳前後のソングヨ氏はその一人である。彼の家は、細い路地を入れていった長屋の一角にあり、4.5畳余りの部屋の中にカーテンをたらし、その奥で子供が寝ている。また隣の部屋との境の泥壁には穴があいていて、中が丸見えである。

彼はキリマンジャロ山麓のカジアド県オロイトキトク(Oloitokitok)区の村の出身で、すでに3年間キベラに住んでいる。彼は伝統的なマサイが使う槍やタテなどを製作するクラフトマンとして働き、寝起きする部屋の他にもう一部屋借りて仕事場にしている。ちなみにひと部屋の1カ月の家賃は300Ksh(約1350円)である。そして彼の所には、定期的にナイロビ市内で有名なみやげ物店の「アフリカン・ヘリテイジ」の仲買人が買いつけにやってくる。ナイロビを訪れる観光客の多くが立ち寄るこの店の存在によって、スラムのマサイの生活は成り立っているのである。

彼はウシ飼いであったが3年前に30頭のウシが病気で死亡したのをきっかけにして、このキベラに移ってきた。彼の母親は、オロイトキトクの村で10頭のウシと50頭のヤギ、ヒツジを飼っているという。彼は稼ぎの一部を母親に送金している。

彼の妻は、彼の故郷とは反対の方向にナイロビから300km余り離れた村に住むサンプルルである。彼女は、キベラに10年在住して郵便局の夜警をしているおじさんを頼って、父親とともにキベラを訪れた時におじの友人のソングヨ氏に出会った。その後彼女は彼と結婚し、一人の子供をもうけている。平素、彼女はサンプルルランドでくらしている。ときおりナイロビのソングヨ氏のもとを訪れたときは、お互いマサイ語で会話している。私がスラムで彼女に出会った時に、サンプルルの女性に一般的な数十に重ねたビーズの首飾りを見せてもらった。彼女は都市に出かける時にもそれを



キライ地区のマサイ(左)とサンプルル(右3人)

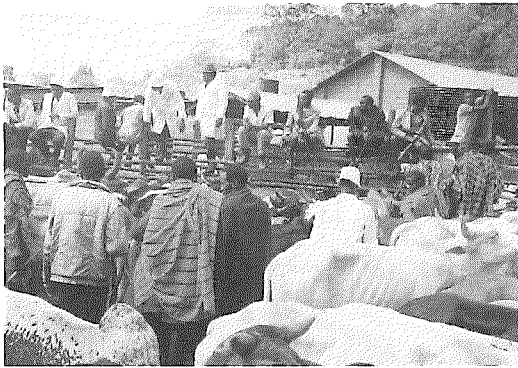
持ち歩いている。

数カ月後に私たちがキベラを再訪すると、ソングヨ氏はキベラからいなくなっていた。彼は故郷に帰ったとも伝えられている。しかし彼の妻は、近くに住んでいたキクユのハチミツバーの主人と再婚をして、バーの仕事を手伝っていた。

ソングヨ氏は都市の中で適応できなかったからゆえに村にもどったのだろうか。しかし、マサイランドとは違ってスラムの中では、婚姻にみられるように異なる民族の組み合わせが生じやすいのである。また彼らの生活は、ナイロビにおける近年の観光客数の伸びを背景として成り立っている。つまり、かつてはナイロビのマサイといえばガードマンが多かったといわれているが、近年の経済動向に対応してマサイの民芸品生産者が都市へ流入しているといつてもよいかもしれない。

### 3 二つの家畜市にて

ナイロビ市内では、市の西部のダゴレッティ地区にウシ市が、市の東部のカリオバンギ地区にはヤギ・ヒツジ市が立つ。そして、ウシ市の仲買にはマサイやソマリの他にキクユやカンバのバンツ一系の農民も参加しているが、ヤギ・ヒツジ市は



ダゴレッティ地区のウシ市。マサイの仲買人は赤い布切れをまとっている

ソマリやボランなどの北ケニアの遊牧民で占められている。どうして、ウシ市の主役を担うマサイがヤギやヒツジをカリオバンギの市へ運ばないのかは、よくわからない。

毎日ナイロビ市内の肉屋の多くがダゴレッティに集まってくる。ここでは、相対で取り引きされたウシが、市に隣接する3カ所の屠殺場で機械をつかって次から次へと解体されているからである。この過程には、マサイは関与していない。彼らは、マサイランドとウシ市の間の家畜の運搬に活躍している。

私は、ダゴレッティに足をのばしてモセスという名の仲買人に会った。彼は手首にプレスレット、耳穴にビーズでできた輪をつるし赤い布切れで体をおおい、いかにもマサイという風采の20代後半の青年である。現在彼は、ウシ市場から数キロメートル離れたキピコ集落に月300Kshの家賃を払って住んでいて、2人の妻と数人の子供たちはナロック県モリジョ区の村に残している。

キピコはおおよそ200人のマサイの仲買人のみが住む集落である。その周辺は政府の援助で手が加えられた緑の草がしげる放牧地となっており、あたりはフェンスで囲まれている。彼らは、早朝ここからウシ市へウシを運び、売れ残ったウシはここ



カリオバンギ地区のヤギ・ヒツジ市、ソマリやボランなどの北ケニアの人々が多い

につれもどされる。ソマリは運んだウシを売れ残ったら困ってしまうので安くても売ってしまうが、この放牧地のおかげでマサイのウシはその心配がないので安く値切れない。

モセスは、自分の故郷のナロック県モリジョから20頭余りのウシの群れをトラックを使わず、一週間余りかけて歩いてナイロビに運ぶ。この道は、トラック道路よりも距離は短く、途中ウシは草を食べながら進むので体重は減らないという。彼は、モリジョでウシ1頭当り3000Ksh余りで購入して、ダゴレッティでは5500Kshで売っているというから、仲買人は金になる商売にみえるがさまざまな損失も多いのである。

彼がウシを売った金でまた別のウシを買ってモリジョに運ぶことがあるが、銀行を使わない彼らがどのようにして大金を貯えているのかはわからない。しかし、ある時彼はキクユの人に7200Kshでウシを売り小切手を受け取ったが、銀行でその小切手が不渡りで換金できなかったことがあった。彼はその男を捜したが、モンバサの方へ行ってしまったという。また、彼はキピコの放牧地で3頭のウシを失っているが、キクユの人が盗んだと疑っている。

ナイロビの人々からみても私たちからみてもマ

サイのビジネスは遅れているように思えるが、彼らなりの方法でナイロビ市場と結びついていると  
 いてよい。そして、ケニアの中で、ナイロビに隣接するナロック県、カジアド県を主な居住地とするマサイのウシの占める割合が高いことは確かである。

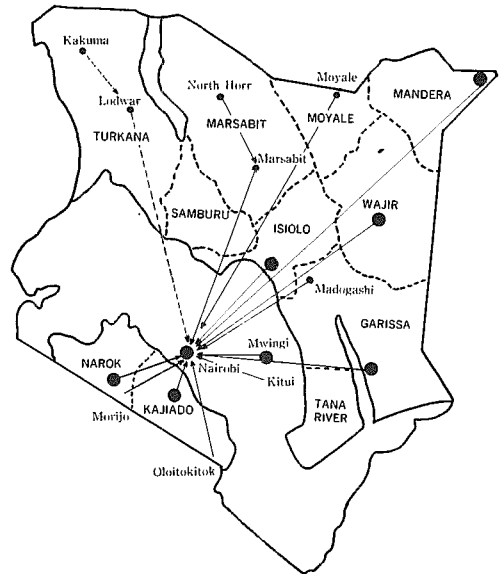
私がもう一つの家畜市であるカリオバンギのヤギ・ヒツジ市へ行くと、ソマリ、ガレ、ボランなどの仲買人がすばやく寄ってきた。「このヤギは、一頭500Ksh」「このヤギはマンデラ県からで肉質がよい」などと売りつけにくるのである。また市にやってくるローリーの数は一  
 日当たり2~12台とまちまちであって、私が訪れた1991年11月27日には、7台のローリーが到着していた。その内訳は、ワジア県1、マンデラ県2、ガリサ県1など北東州内が多く、その他はイシオロやマルサビツツからのものであった。

11月はヒツジの数が少なく、その価格は1頭ふつう400Kshするのが600Kshにつり上がっていた。ヤギの価格はブッシュの中で200Ksh、村で250~300Ksh、そしてナイロビでは400~600Kshと値上がりして行く。

ここは市場といっても、数軒の飯屋に隣接してあき地があるのみで、数十頭余りのヤギ・ヒツジの群れが別々にかたまっている。ヤギやヒツジの屠殺場は、市場から2~3km離れた所にあり、その近くには焼き肉屋がずらりと並ぶ。そこでは、大多数がキリスト教徒のブルジの人々が台の上でヤギの解体をして、ヤギの肉をつるして売っている。

私たちがここを訪れた時、仲買人のシャリフは、100頭のヤギと10頭のヒツジをガリサから運んできたが、キクユやブルジの人に68頭が売れたものの42頭が残っていた。売れ残りのヤギは、市場の周辺の道ばたや川沿いの草を食べさせるために放牧

家畜の流通路



する。そして夜は、仲買人が住むカリオバンギの一角に集めて眠らされる。

彼は、妻子といっしょに市場近くのコンクリート製のビルの2階の一室に住む。家賃は、月500Kshであるという。彼は、北東州でヤギやヒツジを買った後に、トラックでカリオバンギの市へ運んで売却し、売りおると、またブッシュにいてヤギを捜し買い求める。最近妻は、ナイロビの気候が肌にあわず、故郷のガリサにもどってしまった。彼は、150頭のラクダを所有しガリサの近くのバンガリ地域で、彼の兄弟がその世話をしているの  
 である。

#### 4 国民経済の一部を形成する牧畜地域

私は二つの家畜市での観察と聞きとりによって家畜の流通路を図示してみた。この図をみるとケニアの国土の大半が牧畜民の居住区になっていて、北ケニアやマサイランドの至るところからナイロ

ビに向けて家畜が運搬されているのがわかる。確かにトゥルカナ地区の家畜がナイロビに搬入されることは少ないが、ナイロビ市場と結びつかない牧畜民はいないのではないかと思われる。そしてこの流通路は、近年のナイロビの著しい都市成長や道路網の整備などによって形成されてきたと思われるが、いつごろからのものなのかは明らかではない。

家畜の主産地は、マサイがウシを生産するナロック県やカジアド県、ソマリやボランなどの北ケニアの牧畜民が仲買人となり活躍する北東州や北ケニアの諸地域、そしてカンバやキクユなどのバンツー系農牧民が担うナイロビ近隣地区の三つに分けられる。そして、前述したようにマサイとソマリでは家畜の輸送形態が異なりウシを販売する上での競争がみられるのと同様に、北ケニアの牧畜民の間でもヤギやヒツジの販売競争がみられる。

以上の結果をふまえて私は、観光業の発達と家畜市場の形成などの経済動向を背景にして、牧畜民の中でも子供の教育費や家の建設のための人件費など現金の必要性が増し、家畜の販売が促進されているとみている。こうした、牧畜民の社会経済変化と国民経済の動態とをつなげる試みこそが、今後の重要な課題といわなければならない。その意味で、高度経済成長期を境に日本の村落研究が個別の村落誌から社会経済誌にうつっていたことが参考になるであろう。

都市の中の牧畜民は、民芸品生産者と家畜の仲買人の違いはあるにせよ、家畜を故郷で所有している点では共通している。しかし、その家畜は病気で死亡したり略奪されたりする不安定な資本である。今後ますます商品経済が発達するにしたがって、資本としての彼らの家畜が蓄積されていくのか否かを注目していきたいと思っている。

(いけや・かずのぶ／北海道大学文学部北方文化研究施設)